

「イギリス文学Ⅰ」についての一考察

上 村 忠 実

1 はじめに

教職課程は、2019年度に向けて、再課程認定を受ける。外国語（英語）については、コアカリキュラムが策定され、それに沿って科目を設置しなければならない。中高免の「教科に関する専門的事項」には、「英語文学」という事項を含めなければならなくなった。これまで「英米文学」であった事項が、「英語文学」に変更されるのである。

コアカリキュラムでは¹、「英語文学」について、次のように全体目標が策定されている。「英語で書かれた文学を学ぶ中で、英語による表現力への理解を深めるとともに、英語が使われている国・地域の文化について理解し、中学校及び高等学校における外国語科の授業に生かすことができる」。学習内容の項目については、「①文学作品における英語表現、②文学作品から見る多様な文化、③英語で書かれた代表的な文学」と策定されている。それぞれの項目には、それぞれの到達目標が掲げられていて、①については、「文学作品において使用される様々な英語表現について理解している」、②については、「文学作品で描かれている、英語が使われている国・地域の文化について理解している」、③については、「英語で書かれた代表的な文学について理解している」となっている。

このうち、③の「英語で書かれた代表的な文学」は、「代表的な文学」と謳われているので、従来の「英米文学」という事項で扱われていた授業科目

で対応できると考えられる。本学人文学部では、現行の「英米文学」の事項で扱われている授業科目は、「イギリス文学の変遷Ⅰ」,「イギリス文学の変遷Ⅱ」,「アメリカ文学の変遷Ⅰ」,「アメリカ文学の変遷Ⅱ」,「イギリス文学Ⅰ」,「アメリカ文学Ⅰ」の6科目である。

本稿では、その6科目のうち、「イギリス文学Ⅰ」について論じる。①まず、2017年度に開講された「イギリス文学Ⅰ」では、どのような授業が行われたのか、その概略を示す。②次に、学生による評価を示す。③最後に、②を分析することによって、学生が「英語で書かれた代表的な文学について理解したかどうか、また、「イギリス文学Ⅰ」は、コアカリキュラムが要求する内容に合致するかどうかについて考察する。

2 授業概要

シラバスによって、「イギリス文学Ⅰ」の概要を示すことから始めよう。

この科目は、3年次対象の選択科目で、前期開講、2単位の講義科目である。

教育目標は、「各時代を代表する作品を原文で読み、イギリス文学のエッセンスをつかむ」こと、また、「イギリス文学の特質を探りながら、作品を鑑賞するための方法を身につける」ことである。

内容は次のとおりである。「イギリス文学には、その長い歴史を通して珠玉の作品が多数ある。イギリス文学の基本であり、華であると言われているのは英詩である。そこで英詩を読むことによって、イギリス文学のエッセンスをつかみ、その特質を探る。このクラスでは、ルネサンスから現代までの抒情詩を読む。詩の形式や内容について学ぶとともに、イギリス文学のテーマについて考える。各時代の思潮を背景にしつつ、イメージやシンボル、比喩的言語の分析をとおして、詩人の想像力の豊かさ、表現のすばらしさを鑑賞する」。

授業の進め方は、第1・2回：イントロダクション、第3・4回：Robert Burns, 第5・6回：Robert Herrick, 第7・8回：William Wordsworth, 第9・10回：

Alexander Pope, 第11・12回：William Blake, 第13・14回：W. B. Yeats, 第15回：総括である。

教科書は、新井明『英詩鑑賞入門』（研究社、1986年）、参考書は、必要に応じて授業で紹介する。成績評価は、テスト（40%）、提出物（30%）、参加度（30%）。事前・事後学習として、指定された箇所を読んでくること、課題を仕上げるのが課されている。

3 実践報告

2017年度の「イギリス文学Ⅰ」の受講者は、53名であった。内訳は、現代文化学科3年生27名、言語芸術学科3年生25名、メディア・コミュニケーション学科4年生1名である。

ここで15回の授業の詳細について述べることは、紙幅の都合上、できないので、実際にどのような授業が行なわれたのか、その概略を述べる。

(1) イントロダクション

イギリス文学の国民的英雄といえ、ウィリアム・シェイクスピアとチャールズ・ディケンズであろう²。しかし、「イギリス文学Ⅰ」では、この二人は取り上げない。取り上げるのは、英詩である。なぜ英詩を取り上げるのか。その理由を説明するのが最初のイントロダクションである。

イギリス文学には、詩歌、戯曲、小説という主要なジャンルがある。イギリス文学の歴史をひも解けばわかるのだが、古英語の時代から存在していたのは詩歌である³。紙や筆記具がなかった時代に、人々が文学を生み出し、それを伝えるとすれば、口承でしかあり得なかった。そのためには、短く、簡潔で、しかも暗記しやすい形式でなければならなかった。メロディーが付けられると歌になる詩は、その要件を満たしていたのである。

やがて中英語を経て、ルネサンス期に戯曲が誕生し、宗教劇から世俗劇へと展開した⁴。戯曲は16世紀のシェイクスピアで一つの頂点を迎える⁵。小説

が誕生するのは、18世紀になってからで⁶、詩や劇に比べれば、小説は200年の歴史しかない。そう考えると、古英語の時代から現代までを網羅しているのは詩である。つまり、イギリス文学を俯瞰できるのは詩である。そのような理由で、「イギリス文学I」では、詩を取り上げる。

次に説明したのは、韻文の特徴についてである。英詩は、文体上、二つの特徴が見られる。それは、韻を踏んでいることと、リズム（律）があることである。韻律について教えるためにはコツがある。特に、律（リズム）について理解させるためには、日本語と英語のリズムの違いから説き起こす必要がある。そのためには、音節、母音、子音、音節リズム、強勢リズムについて説明しなければならない。そのための教材として、「きらきら星」(“The star”)を使用した。

韻律について説明したあと、詩の読み方について講義した。英詩を読む／鑑賞する（appreciation）ためには、三つの手順を踏むように指導した。①韻律分析（scansion）、②翻訳（translation）、③解釈（interpretation）である。そのことを、ロバート・バーンズの“A Red, Red Rose”を用いて説明した。

この詩は1行目の“O my luve’s like a red, red rose”⁷を説明するだけでも、時間がかかる。なぜなら、頭韻（alliteration）、母韻（assonance）、反復（repetition）、直喩（simile）という表現技巧について説明しなければならないからである。また、それに加えて、luve（loveの意）の翻訳、roseやredの象徴性（symbolism）・心象性（imagery）について説明しなければならない。このluveは抽象名詞か、普通名詞か。roseの象徴性は、例えばlilyとはどのように異なるのか。redの心象性は、例えばpinkとはどのように異なるのか、などである。

一方的に講義すると学生は退屈するので、自分の抱くroseやredのイメージについて、一人ずつ意見を言わせた。そのうえで、「ああ、私の愛する人は赤い赤いバラのようだ」⁸という1行を解釈させた。「私」とは誰か。「私の愛する人」とは誰か。「赤い赤いバラのようだ」と比喩を用いて表現されているその人はどのような人か。芸能人にたとえると、誰を連想するか。そのような質問をして、一人ずつ意見を言わせた。

「私」は男、「私の愛する人」は女、二人は愛し合っている恋人同士である、という意見が多く出された。そこで、二人は愛し合っている恋人であるとして言えるのか、と尋ねた。「私」がその「人」を愛していることはわかるが、「私の愛する人」が「私」を愛していると、どうして言えるのか。つまり、なぜ相思相愛であると言えるのか、と尋ねると、答えられない。しばらくすると、「私」が一方向的にその「人」を愛しているだけ、片思いかもしれない、という意見が出された。そのあと、「私」はストーカーかもしれない、という意見も出された。

そこで、次に、これは恋人同士の恋愛ではなく、親子の愛だとは考えられないのかと尋ねた。「私」は父親であり、父親が娘のことを、「ああ、私の愛する人は赤い赤いバラのようだ」と言っていると考えることはできないのか。学生は、それも有り得ると答えた。では、「私」は男でなければならないのか。「私」は母親（女性）である可能性はないのか。母親が愛する娘のことを、「ああ、私の愛する人は赤い赤いバラのようだ」と言っていると考えられないのか、と問うた。すると、それも有り得ると答えた。ということは、「私」は男性であっても女性であってもよい。「私の愛する人」は恋人であっても、娘であってもよい。それ以外のパターンもあるかもしれない。

以上のようにして、詩は1行ずつ、解釈の可能性や多様性を探りながら読むこと、そしてその中で最も妥当だと思われる解釈について考えを深めることを教えた。

(2) イギリス文学のテーマ

次に、イギリス文学のテーマについて講義した。イギリス文学の三大テーマは、愛、時間、自然である⁹。バーンズの“A Red, Red Rose”には、三大テーマがすべて含まれているが、その中でも、特に愛に焦点を当てて、愛がどのように表現されているかを考えさせた。次に、ロバート・ヘリックの“To the Virgins, to Make Much of Time”を読み、時間について考えさせた。そのあと、ウィリアム・ワーズワースの“The Daffodils”を読み、自然につい

て考えさせた。

並行して、愛、時間、自然というテーマが、なぜ三大テーマになり得るのか、ということについて考えさせた。ここでも一方的な講義にならないように、質問して、それに答えさせるという方法をとった。ディスカッションしているうちに、学生たちは、この三つのテーマがすべて人間に密接に関わる概念であるということに気がついた。そこで、その気づきを補足しながら、文学は人間を描いているということ、また、人間に内在する可能性も描いているということを教えた。

そのあと、何百年も前にイギリスで書かれた文学を、なぜ今日、日本で読まなければならないのかについて講じた。教科書に掲載されている作品はすべて、多くの人がその内容に共感し、作品として優れていると評価してきたからこそ、読み継がれている。もし共感する人がいなければ、また、優れていると評価する人がいなければ、その作品は消えてなくなる。つまり、時間と空間を越えて読み継がれてきた作品は傑作であり、傑作には、何か優れたところがある。それは何か。それはどのように優れているのか。それを考えなければならない。そのためには、三大テーマを意識しながら鑑賞する必要があるということを講義した。

それと同時に、どのように読むか、ということについて説明した。例えば、新批評（New Criticism）のように¹⁰、書かれている言葉だけを読む、という読み方がある。その一方で、書かれている内容を自分に当てはめて読む、という読み方もある。対照的な二つの読み方について説明したあと、学生には前者をふまえて後者に進むという折衷案のような読み方を薦めた。前者だけだと、分析的でおもしろくなく、後者だけだと、自分勝手な妄想の世界に入り込む恐れがある。両者を合わせたような読み方をすれば、独りよがりにもならず、それでいて共感することも多く、読んでいて楽しいだろうと考えたからである。

(3) 授業の進め方

ここでは、一編の詩をどのように読み進めたかについて述べよう。

既述したように、韻律分析、翻訳、解釈の手順を踏みながら読むのだが、その前提として、正しく音読できなければならない。詩は朗読するものだからである。そこで最初に、一人1行ずつ音読させて、発音をチェックした。英語に慣れていない学生も受講しているので、発音に関しては、できる学生とできない学生の差が著しい。いずれにせよ、発音の誤りを正し、全員で発音練習をして、曲がりなりにも正しく音読できるように指導した。それから、韻律分析、翻訳、解釈を行なった。

授業が一編の詩の途中で終了する場合は、最後の10分間で、読んだところまでのコメントを書かせた。そのコメントの中で、内容が優れているものについては、次回の授業で導入として紹介した。自分とは異なる考え方があることに気づかせたかったからである。

詩の解釈の中で、鍵となる表現が出てきた場合は、それを自分に当てはめて考えさせ、それを一人ずつ発表させた。鍵概念を日常生活に当てはめることで、学生は詩の内容を身近なものとしてとらえることができるようになる。また、他者の意見を聞くことで、とらえ方の多様性を学ぶことができる。意見交換をさせるのは、学生のそれまでの思考の幅や枠が、少しでも広がればよいと考えるからである。

一編の詩を読み上げたときは、次回までに、800字でエッセイを書いてくこと課した。課題は、詩を読んで何を考えたかについてである。学生は、他者の意見（もちろん、教科書の注釈や教員の解釈も含まれる）を踏まえたうえで、もう一度、詩（原文）と向き合い、最終的な自分の考えを作文するのである。

(4) 表現形式

三大テーマについて講義したあと、オード (ode) という表現形式について教えた。教材は、アレグザンダー・ポープの“Ode on Solitude”（「孤独に

寄せるオード)である。孤独というのは、学生が敏感に反応するテーマの一つである。孤独は良くないことか。孤独は恥じるべきことか。一人でいてはいけないのか。誰かと一緒にいなければならないのか。そのような問いを発すると、学生は真剣に耳を傾ける。

直前に読んだ詩は、ワーズワースの“The Daffodils”であるが、そこでは2種類の孤独が詠われている。一つは、1行目の“I wandered lonely as a cloud”のlonelyから想起されるlonelinessであり、もう一つは、21行目で“Which is the bliss of solitude”と詠われているsolitudeである。そこで、まず、lonelinessとsolitudeのニュアンスの違いを教えた。次に、詩の中の「私」はlonelinessからsolitudeに向かい、最終的には、一人であることを「孤独の祝福」(bliss of solitude)と表現していることを確認させた。これを踏まえたうえで、ポープの詩を読んだのだが、詩の解釈をとおして、誰かと一緒にいることが良くて、一人でいることは良くない、という言い方は短絡的であり、必ずしも正しい言い方ではないことを論じた。誰かと一緒にいることには、良い面と悪い面がある。それと同じように、一人でいることにも良い面と悪い面がある。ポープは、オードという形式で、一人でいることの良い面に着目し、孤独をほめたたえている¹¹。物事は単眼的ではなく、複眼的に見なければならないと結論づけた。

(5) 表現技巧

次に、表現技巧の一つとして、象徴(symbol)について教えた。教材は、ウィリアム・ブレイクの“The Sick Rose”である。

この詩は、わずか2連8行から成る。学生は短いことを喜んだ。そして、和訳が難しくもないことも喜んだ。短くて、言葉が易しいので、この詩は簡単だと思ったのである。そこで、この詩については、通常とは異なる方法で授業を進めた。まず、何も解説しないで、とにかく自力で詩の解釈を書かせてみたのである。

この詩には、バラと虫が登場する。バラは何の象徴であるのか。虫は何の

象徴であるのか。考えられる解釈の多様性や可能性を書かせた。それを無記名にして全員分コピーし、それを綴って、翌週、全員に配付した。他者の解釈を読ませるためである。

授業では、学生が思いつかなかった解釈の可能性について講じた。宿題として、他者の解釈を読み、講義での補足を踏まえたうえで、最終的に自分はどうのように考えるのか、自分の解釈を800字でまとめてくることを課した。翌週、学生は課題をプリントアウトしてきたので、その要点を一人ずつ口頭発表させた。

こうして、象徴という表現技巧を手がかりに、文学を自力で解釈し、鑑賞するための方法を学ばせた。

(6) 行間を読む

ブレイクの詩を読んだあと、ブレイクから多大な影響を受け、無名であったブレイクを世に知らしめたW.B. イェイツの“The Lake Isle of Innisfree”を取り上げた。行間を読むことを教えるのが目的である。

1行目では、“I will arise and go now, and go to Innisfree”と詠われているが、「私は起き上がって、今行こう」とは、どういうことなのか考えさせた。I will ariseということは、「私」は、今、起き上がっていない状態である。それはどういう状態か。そして、それはどういう意味か。助動詞がshallではなく、willであるのはどういうことか。つまり、書かれていることを理解したら、それを手がかりに、書かれていないことを考える必要性を教えた。要するに、行間を読むことの重要性を教えたのである。

同時に思想のとらえ方も教えた。人間の心は、比喩的に言えば、振り子のようなもので、一方の極から、もう一方の極へと向かうことが多い。隣の芝生は青い、ということわざがあるように、人間はないものねだりをする。この詩では、「私」の心は、田舎の孤独な静寂に向かっている。ということは、「私」は都会の群集の喧騒の中にいると考えられる（そのことは最終連で詠われている）。このようにして、行間を読む訓練を行なった。

以上のように、授業では、シラバスに書いているとおり、6編の詩を読んだ。最初のほうは、学生の理解度を見極めながら、ゆっくりと丁寧に読んだので、予定していた進度にはならなかった。しかし、三大テーマを教えたあと、徐々にスピードアップして読んだので、予定していた詩をすべて読み終えることができた。

4 学生による評価

学生はこの授業をどのように評価したか。ここに二つの資料があるので、それを示したい。一つは大学が実施した授業評価、もう一つは、筆者が実施した授業評価である。

(1) 大学が実施した授業評価

大学の自己点検・評価・FD委員会が実施する「学生による授業評価」は、第11回目の授業（6月22日）で実施した。受講者総数53名のうち、3名はすでに失格であった。したがって、第11回目の授業時に単位修得の見込みがあったのは50名で、そのうちの47名が回答した。結果は次のとおりである。項目のあとの点数は、5点満点の評価点、カッコは標準偏差を示す。

授業について：

話し方、説明のしかたがわかりやすい	4.34 (0.92)
授業に集中できる雰囲気をつくっている	4.36 (0.74)
授業のテーマや目標が理解できる	4.38 (0.71)

自分（学生自身）について：

この授業によって今後の勉強意欲が増した	4.17 (0.94)
私（学生自身）はこの授業を真面目に聴いている	4.43 (0.62)
私（学生自身）はこの授業に積極的に参加している	4.45 (0.65)

授業について：

各自に示される教材（プリント，教科書，参考図書など）は， わかりやすい	4.38 (0.71)
授業進度は，自分の望む速さである	4.19 (0.85)
この授業によって視野が広がったり，考えが深まったりすると思う	4.38 (0.85)
この授業によって知的関心と興味が高められる	4.38 (0.80)

(2) 筆者が実施した授業評価

筆者は、「イギリス文学Ⅰ」が，再課程認定において，コアカリキュラムで求められる到達目標を達成したかどうか探るために，最終回の第15回目の授業で無記名による授業評価を実施した。単位修得の見込みがある50名全員が回答した。結果は次のとおりである。なお，誤字，脱字，句読点や表記の誤り，日本語としておかしい表現も見られるが，原文のまま記載している。また，分析するために，便宜的に番号を付している。

①イギリス文学について，歴史的背景を含めて理解することができたと思いますか。

とてもそう思う	13
まあまあそう思う	36
どちらともいえない	0
あまりそう思わない	1
まったくそう思わない	0
無回答	0

②作品の鑑賞を通して、人間・自然・社会について洞察を深め、豊かな感受性を育むことができたと思いますか。

とてもそう思う	25
まあまあそう思う	25
どちらともいえない	0
あまりそう思わない	0
まったくそう思わない	0
無回答	0

③学んだ内容をもとにディスカッションしたりエッセイを書いたりすることで、思考や感情を共有し学び合うことができたと思いますか。

とてもそう思う	25
まあまあそう思う	23
どちらともいえない	1
あまりそう思わない	1
まったくそう思わない	0
無回答	0

④イギリス文学を読むことによって、身についたり、養われたり、向上したりした力がありますか。あるならば、それはどのような力でしたか。(複数あれば、複数書いてください。)

[401] 読むだけでなく、それについて解釈したり、考えたりするようになった。

[402] 短い文章の中から、色んなパターンで深く想像する力がつきました。

[403] 文学＝人間を表しているので、この授業で自分と向き合う時間がとれました。自分と向き合う時間がとれた結果、人間として深い考えができるようになったと思います。

[404] 教養と知識と人の学問とは何かということ

[405] 今、やらなければならないことを、すぐにとりかかるという考え方

- [406] 普段の生活の中で生きることが多かった。人の愛し方、死についての考え方
- [407] 自分の視点だけでなく、他の視点について考え読み解く力
- [408] 想像力、考える力
- [409] 感情の受けとり方、表現方法のたくみさ、愛についてのとらえ方
- [410] 愛・自然・時間についての考え方
- [411] 感性。いろいろ考える事。
- [412] 詩から読みとる背景
- [413] 想像力
- [414] 想像する力が身に付きました。
- [415] 感性、考える力
- [416] 一つの詩でも、様々な読みとり方、とらえ方があるので、色々な見方ができるようになった。
- [417] 想像力
- [418] ものごとを考える時に様々な視点から考えるようになった。
- [419] 想像力、詩の構成
- [420] 文学を鑑賞する力
- [421] 文学を読むことによって、今までより、文章を読んでそのことに対して自分なりに解釈する力が上がったと思います。
- [422] 想像力が向上したと思います。
- [423] 想像力
- [424] 想像性
- [425] 作者が本当に言いたいこと、詩をただ読んで「ふーん」と納得するのではなく、その奥にある伝えたいことを深く考えて人とちがう視点から結論をみちびき出す力。
- [426] 感受性を養う力が強まったと思う。
- [427] 毎回、感想文を書いていたので、文章を書く力が向上したと思う。
- [428] 作者の考えを深くまで読み解いていく所

[429] 理解力

[430] 詩などの作品を、書かれていること（単語の意味など）そのままに受けとるのではなく、推測して作者が本当に伝えたいことを考えられるようになった。

[431] みんなの意見をきけたので、今まで考え方も「私の考え！」で留まっていたところを、他にもこのような考え方があるのか！と考えさせられ、新たな思いや、考え方が深まったりしました。

[432] 考える時に文学的に考えられた。

[433] 積極性、あきらめない、最後までやりきる力

[434] 色々なパターンの解釈を考える力

[435] 人が書いたものに対して、その人の考えを理解しようとする力が身についたと思います。

[436] 作品を身近な事に置きかえることができるようになった。

[437] 物事のとらえ方や考え方の幅が広がった。

[438] 文章や言葉をそのまま読むのではなく、自分なりの解釈を考える力。

[439] 物の見方や考えの幅が広がった。

[440] ものごとを深く考える力、解釈する力

[441] 思考力や表現力が身につきました。

[442] 文学的表現（花→女性など）

[443] 自分の身近に起きる様々な出来事を解釈していく力

[444] 1つの解釈だけでなく、いろいろな面から解釈してみようという力がついたように思う。

[445] この詩は自分とどう当てはまるかな、とか、この詩は一見意味が分からないけれど、どんな意味があるんだろうと詩の意図であったり真意を考えるようになりました。

[446] いろんな事が起こるけど、それはすべてにおいて意味があるということが身についた。

[447] ものの見方に対する考え方が変わり、1つの出来事についてあらゆる

面から考える想像力が身についたと思います。

[448] 自分を改めて省みることができた。

□無回答 2

⑤この授業を受けた全体的な感想を述べてください。

[501] 文学は人間のことを描いているということを改めて感じる事ができた。

[502] 人生の教訓になることばかりでした。みんなの考えを聞くことができて、新しい見方を広げることができたと思います。

[503] 他の人の意見を沢山聞けたので、面白かったですし、新しい発見もあり、視野も広がりました。

[504] お金払ってこんなに満足するような授業は他にないと思う。テレビで名作文学についての授業が感動的だと話題になったが、先生の授業の方が私たちに分かりやすいように説明してくれるので正直そんなものよりも遙かにおもしろい。

[505] イギリス文学で取り扱った詩は、自分の生活に例えることができるので、人生を見直すことができました。

[506] 人が多いのに集中していて良かった。

[507] イギリスの文学の授業を受けて、文学の新しい見方や表現のしかたなど、先生の話などを含めて分かりやすく説明されていたのがよかったですと思いました。

[508] 新しい詩を初めて読んだ時の想像と授業終えてもう1度詩を読み返すのとはこんなにも想像していたものと変わること自分自身驚いた。訳す人によって解釈が変わり、たくさんの視点から1つの詩をとらえることができた。

[509] 自分の考えと他人の考えが違っていたり共有し合い、より深く学べた。一人の詩人ではなく、色んな詩人のポエムを学べて良かったです。

[510] この授業を受けて、今の自分の生活を見直す必要があるなと思いま

した。どれだけ今の生活で時間を無駄にしているか、もったいないな
と思いました。今すべき事を考え、行動にうつしていこうと思いました。

[511] 「詩なんてつまらない」と感じながらの授業でしたが、読んでいく
うちに、「こういう解釈のしかたがあるんだ」という発見だったり、自
分で考える力が身についたので、すごく良い経験となったと思います。

[512] 様々な詩に触れることができてよかった。

[513] 数行のポエムから人間とは何なのかという答えがない哲学的なクエ
スションを探求していく時間が楽しかった。

[514] この授業を受講しなければ、絶対に出会えない文学に触れることが
できた。

[515] 英文の和訳を折り返しながら、その文についてくわしく考えていき、
自分で考える力やそれを言葉にする力など自分の為になるような授業
でした。

[516] イギリス文学（詩）にふれることで自分の考えとは違うより幅広く
みんなの意見をきくことができました。

[517] 作者のメッセージをどう受けとるか、自分で考えることができ自分
の考えを見直すことができた。詩が与える影響力を知ることができた。

[518] 詩が文学史のトップであることを数々の詩を読んで改めて認識した。

[519] 愛や自然や時間など、すべての人にいつの時代にも理解できるよう
なテーマの文学は、色あせることなくむしろ評価され続け、人々に愛
されるものだと思った。

[520] 詩の奥深さを学ぶことができました。先生の話も面白かった。

[521] 今までイギリス文学について何も知らなかったけど、文学の中でい
ろいろな自分にも当てはまることもあり、面白いものだと分かりまし
た。

[522] 先生が具体的な例を述べたりしてくれたので、想像しやすく、わか
りやすかったです。授業を受けている人全員が、自分の考えを言うこ
とによって、色々な物の考え方やとらえ方を知ることができました。

- [523] 今までだと、ただの詩であるという考えしか出来なかったけど、この授業を受けてたつた何行かの詩から、こんなにも多くの想像が出来るのかと思いました。自分の人生と似ている部分や、経験しないであろうことも書いてあって考えるのが面白かったです。
- [524] この授業では、文学とともに様々なものとのらえ方をしたり、作品を通して、とても面白く感じた。
- [525] 自分が思っている考えとは違う考え方など、新たな発見がイギリス文学をとおして学べて面白かったです。
- [526] 詩は英単語のそのままの意味をならべても意味が通じなかったりしっくりこない場合が多いので、それらを意識して“～だからこういう意味にとらえることもできる”というような訳の仕方、解釈の仕方を学べてよかった。自分の意見を言ったりする授業はあまりないので、自分の考えを口に出して言うことは難しかったけど、こういう経験もできてよかったなと思った。
- [527] イギリスに行ったことはないが、イギリスの自然をまるで自分の目で見ているかのように感じられた。
- [528] 今まで、ポエムを読むことが、あまりなかったので、読んでみると思っていたよりおもしろかったです。もっと読んでみたいなと思いました。
- [529] 自分の意見を言うのがあまり好きではないのですが、この授業はそれが多くて緊張しました。でも他の人の意見がきけるのは良いと思います。
- [530] イギリス文学を読んで、1人で学ぶには、難しかったけど他の人の意見などを共有しながら理解することができた。
- [531] 文学作品はひとつずつ、一行一行読み解いていったことで、初めの頃よりも作品がおもしろく感じました。他の人の意見をきいて、自分が最初に解釈していた内容とはまた違った捉え方も発見できてより理解を深めることができたと思います。
- [532] ポエムに触れる機会がなかったため、授業で取り扱うもの全てが新

鮮でした。一つ一つ解説があり、1人で読むには難しいポエムもしっかり理解できました。短いからこそ分かりにくく難しいところもありましたが、先生が楽譜や絵のプリントを配布して下さったので、より理解を深められました。

[533] 2年次の変遷とは違って、作品を通して自分自身でしっかり物事を考える事ができ、感受性が豊かになれた。

[534] 今まで英語を訳せといわれても、どうせ無理だ、できない、楽しくないと思っていました。でもこの授業を受けたことで、自分で訳しながら少しだったけど詩の情景が頭に浮かんだりして、とてもおもしろかったです。もっとたくさんの詩を読み、伝えようとしていることが何か知りたいと考えました。

[535] 詩がこれほど深い考えやメッセージ性が強いというのを初めて知ることができました。どんどん詩を読んでいくにつれて自分の想像力が養われたような感じが分かってきました。

[536] 言葉の力はすごいなと思いました。

[537] 初めはイギリス文学という外国の作品を扱うものだったので、国民性も異なるし、内容を理解する段階までは難しいだろうと思っていましたが、題材が私たちが想像できるものなども多く、私自身ここまで文学を読み進めてきて、理解が足りないなと感じることは何度かありましたが、作者の考えと反対の考えを持つという体験は初めてで、とてもおもしろかったです。

[538] 物事のとらえ方や考え方の幅が広がった。

[539] 普通に生きていたら、考えないようなことを考えることができた。

[540] 文学（詩）の読み方を学んだうえで解釈の仕方や考えを広げることができたのでたのしかった。

[541] 初めてこの授業でレポートを書いてきた時、先生が「じゃあ今から自分たちの書いてきた内容を簡単に言って下さい」と言われて「え！なんで？」と思いましたが、人の考えや意見をきくことで、こんな考

えや見方があるのかと勉強になったし、自分も色々な視点で詩を読むことができたし、レポートをかくときも、こんな内容にすればいいんだ！と学び、色々な人のものを参考にできた。

- [542] 先生が私たちの身近にあるテーマでお話をしてくださったので、苦手なポエムも深く読み取ることができました。
- [543] 短い詩の中で多くの意味が含まれていて、読む人によって様々な解釈ができて、とてもおもしろいと思いました。自分1人で作品を読んでも、おもしろいだろうけれど、理解が難しい表現など（どんな意味なのか）などを身近な例で教えていただけるのでわかりやすく、授業が楽しいです。
- [544] 詩の一つ一つが自分の人生に大きく関わっているとは思いませんでした。たった一行の文章でも様々な解釈をすることができるので、先生の解説がないと一人で読むのは難しいと感じました。
- [545] 文学をいくつか読んで、詩は短いけれど、内容を深く読みといてみると、いろいろな解釈ができて、自分の考えが深まったり、自分の生活の中でも、様々な面から物事を考えることができるようになったのでよかった。
- [546] 初めは英詩というのは難しいものだと思っていましたが、小説に比べて量も少ないし、解釈は多くできるし、自分に引き寄せて考えやすかったので、とても英詩は面白いものだと思うようになりました。
- [547] いろんな人の詩を読んで、どの詩においてもメッセージせいがあったためになりました。教科書のチョイスもよかったと思います。
- [548] イギリス文学は好きな事がわかった。
- [549] 英詩を読んだ経験が浅い中、この授業を受けました。最初はすごく難しいことを言っているような気がしていましたが、文学というのは我々人間のことを言っているのだとわかり、英詩を身近なものに感じられるようになりました。
- [550] 私が一番「The Daffodils」について勉強したことが印象に残りました。

「1人」ということをテーマにして、自分の生き方について考えることができたと思ったからです。また、イギリス文学は訳さないといけないので、英語力も身についたと感じました。

□無回答 0

⑥この授業を受けて良かった点がありますか。あるならば、どのような点が良かったですか。

[601] 考えが広がったのが良かった。英語の勉強になった。

[602] 詩にふれる機会はなかなか自分からはつくれないので、15回たっぷりイギリスの詩にふれられて良かったです。

[603] 先生のお話。

[604] 詩を自分の生活に置きかえて、考えることができたので、家での過ごし方など改善することができました。

[605] 心理学の部分が面白かった。

[606] 新しい視点、思想、歴史、価値観にふれ、考える力をつけることができたこと。

[607] 他人と考えを共有したり、話の例として私たちの私生活、日常のような近くのこと話して下さることで授業がより分かりやすくなった。

[608] 表現方法一つで色々なパターンを考えられた。他人との意見交流。トピックがおもしろかった。すごく難しいものではなく身近で考えやすかった。

[609] 詩にふれることによって、様々な捉え方があり、人によって解釈が全く違うので面白かった。

[610] 5番でも言った通り、自分で考える力が身についたことです。

[611] この授業のみではなく、ゼミなどでイギリス文学に度々ふれているので、ものの考え方が少し広がったように感じる。

[612] 考え方をやしなうことができ、想像力が豊かになった。

[613] 一つの英単語に対してさまざまな意味があることを学べること。

- [614] いろんな文学を読むことができました。またすごく読みやすい詩が多かったです。
- [615] 教科書の日本語訳を読んで別の文の訳し方をつかめたこと。
- [616] 文学にふれて、詩の捉え方や感じ方が様々あり、思いつかないような意見を聞くことができた点。
- [617] 想像力豊かになった。
- [618] 文学の中にひそむメッセージを感じ、生活に活かしていくことができた点。
- [619] イギリス文学は、今まで触れたことがなかったので、この授業で詩を読むことによって、イギリスの文化にも触れることができて、良かったです。
- [620] 皆の意見を聞くことで、視野が広がったことです。ここからこういう風に考えることが出来るのかと気づくことが出来ました。
- [621] 作品の例から先生が生きていくことの大切さやアドバイスが自分のためになり、良かった。
- [622] 人生の考え方など自分ではとらえられなかった視点が発見できた。
- [623] レポートを書くときに、自分の考えを深くまでほりさげたりして、ふだんそういうことはしないので、自分がどういう考え方をする人間なのか、とか、価値観を改めて知ることができてよかった。あと他の人の意見も聞いたので、みんなすごい考えが深いな—とか、説得力があるな—とか、良い刺激を受けられてよかった。
- [624] 「人間の心」について深く考える機会が得られたということ。
- [625] 自分の考えだけでなく、他の人がどんなことを考えたのかがわかった点がよかったです。
- [626] 他の人の意見を冊子にしていた所
- [627] 私達の生活の中での出来事などを例えて頂いたので、授業内容がわかりやすかったです。
- [628] ↑5の質問でも書いたように、他の人の意見もきけたこと。

- [629] 長文の英語はなかなか読もうとは思えないけど、ポエムの奥深さを
知ってこれからポエムを読んでみるのも良いかなと、自分の感覚自体
が良い方向に変わりました。
- [630] 先生のお話で印象的なことが多く、それらは作品と関連しているこ
とばかりだったから、非常に学びやすかった。
- [631] 考えづらい表現がでてきた際に、先生がわかりやすいように私たち
の身近なことで例えてくれたり、アニメなど誰でも知っている話を例
えに挙げて、どういうことなのか示してくれた点。
- [632] みんなの意見をきけた点。
- [633] 教養が増える点。
- [634] 文学作品という言葉に対しての苦手意識が少なくなったように感じ、
また、「文学」という言葉の固定概念も解消されたことです。
- [635] 物事のとらえ方や考え方の幅が広がった。
- [636] 一つの詩から、一人一人違った解釈が生まれ、それを共有できた点。
- [637] 4と同じ
- [638] 先生の話し方や、その詩の内容をわかりやすく日常の例にたとえて
いたのがおもしろくて、わかりやすかったのでまねしたいです。人の
意見を聞くことで色々な考え方や視点を身につけることができました。
- [639] 様々なテーマから自分自身を見つめ直す、いいきっかけとなりました。
- [640] 同じ学科の中でも異なる考え方を知ることはできるけど、全く違う
勉強を普段している他学科の人の考え方などそういう考え方もあるの
か、と発見があった点。
- [641] 様々な人の意見をたくさん聞いて、とても視野が広がりました。
- [642] いろんな人の意見を聞くことができたのはよかった。また、レポー
トを書くことで自分の意見をまとめる力がついたように感じた。
- [643] 先生の例え話が分かりやすく、面白かったです。また、物事には二
面性があるということを先生の話を通して深く理解できました。
- [644] 私はみんなの前で自分の意見を言うのがとても苦手でした。ですが

「イギリス文学Ⅰ」についての一考察（上村）

意見を言う機会がたくさんあり、少しは克服できたし、要点だけ言うコツもつかめました。

[645] 詩を読む事は自分からするなんてないので、イギリス文学の基礎をまなべて、イギリスに住む人達の思想の中に何があるのかわかった気がする。

[646] 今まで知らなかった言葉、考え方を見つけ、イギリス文学に対する興味が深まった点です。

[647] 上にも挙げたけど、自分について考える機会を持てたことです。「愛」「時間」「自然」をテーマに自分のことを見つめ直すことができたのでよかったなと思いました。

□無回答 3

⑦この授業で改善すべき点はありますか。あるならば、どのような点を改善すべきだと思いますか。

[701] 隣の人と話して、どう考えているかを聞く時間があっても良いかなと思います。

[702] 先生の授業がうけたいのに、必修しかなくて選択もリポート不可なので、もっとうけたいです。

[703] 詩を書いた人物のことについて、もっと知るべきだったかなと思いました。

[704] 特にありません。

[705] 特にないです。

[706] ないです。

[707] ないです。

[708] 発音の授業じゃないのに発音チェックをする必要性がわからなかった。

[709] 訳をさせるときに生徒の声が小さいので何を言っているのかわかりませんでした。

[710] 他学科と比べて発言するところ。

[711] いきなりあてられるの準備ができない。

[712] 特になし。

[713] ない

[714] ちょっと暑い。

[715] 単語を訳するのが少し早くてついていけなかった。

[716] 特にありません。

[717] 授業のやり方が毎回違ったので、少し統一してほしいと思った。先生の話の後にレポートを書いて授業終わりに提出するのが1番やりやすかった。

[718] 特にないです。この前期のままが楽しくて、よかったです。

[719] 詩の意味だけでなく、redとroseがかかっているとかそういうのがあれば、もっとききたかった。

[720] 課題が少し多くてきついなと感じることはありましたが、授業内容の改善点は特にありません。

[721] 特にありません。

[722] ざわざわして集中できないことがあったので、座席は指定にしてほしいです。

□無回答 28

⑧イギリス文学を読んで、何を学びましたか、何を考えましたか。詳しく述べてください。

[801] 難しそうな文学作品も、人間私たちのことをかいているということの解説が分かりやすく、理解がしやすかった。人それぞれ解釈があるということをもっと体験できおもしろかった。映画やドラマもおもしろいが、言葉だけで書かれた文学には無限の可能性があるのでまたたちがったおもしろさがあることを学んだ。

[802] イギリス文学には、「愛」「時間」「自然」の3つの要素でできているということで、人生において、この3つが大切なんだなということ

学びました。その中でも、「愛」というのは、とても複雑で難しいものだなと思いました。

[803] 我々人間は、愚かで弱い部分が沢山ある一方で、優しさもかねそなえている。光と影の関係と同じように。自分の嫌いなところ、好きなところは人それぞれあるが、それは皆同じ「人間」なのだから仕方がない。だれにでも悩みはある。つつい「自分だけ」と考えてしまうが、「人間」は悩み、病みもする。この授業では、そういうことを教えてもらいました。私は「人間」、皆も「人間」。いやなこと、苦しいことも皆にある。人間として生きていくのをもっと文学を知って楽しみたいです。

[804] 詩というものに興味をもたないことが多く、音楽でも、「いい歌詞だな」とは思わず、曲のアレンジがどういった手法があるのか、という方面でしかみたことがなかったので、今回の授業を受けて、ポスターのフレーズやいろんな文字を意識して見て考えたりするようになりました。特に気に入っている詩人がウィリアム・ブレイクなので、もっともっと自分なりに解釈して、もっといろんなことを学びたいと思いました。私たちは言葉の海の中にいて、このたくさんある言葉の中から詩人は言葉を使って船を編む、そしておぼれないように私たちを導いてくれるのでしょうか。

[805] イギリス文学を読んで、私は自分の生活を見直すことができました。人生は1度きりだし、今できることは、後回しにせず、すぐに取りかかることを心がけようと思いました。

[806] 詩は、小説よりも大切なことしか書かれておらず、読みやすいのに様々な解釈ができて良かった。物事を主観的ではなく、客観的にみることで、考えの幅が広がることがよく分かった。歌の歌詞でも深く考えるようになった。人生の教科書のようなだとも思った。名作が残っていく理由を知れてよかった。

[807] イギリス文学を読んで文学内の表現による考察や解釈はもちろん、

それを書いた作者の持つ歴史背景、思想などを含めて作品を読むという事を学びました。特に時間についての考え方は自分たちと共通する点やそうでない点など比較して考えるという観点からも新鮮でした。愛については、恋愛だけでなく、友愛、親子愛、自己愛など、様々な愛のとらえ方があり、そのとらえ方次第で解釈が大きく変わっていくのだなと感じ、解釈の多様さをうけとめ、しっかりと吟味する力がとてもよくついたと思います。

[808] イギリス文学の詩には、時間、自然、愛の3大テーマがあり、人間と密接しているということ学んだ。1つ1つの詩をよみ、比喩が使われていたり、1文をどう解釈するかたくさん頭を使った。筆者の思いや何について書かれているのか考えた。

[809] それぞれの詩人の背景。詩人同士で尊敬しあっていたこと。愛は今も昔も変わらなくずっと関わってくる、共通のものであること。詩人の偉大さ。卒論で活かせるような表現方法の仕方。色々なことを学べてとてもよかったです。

[810] 病気などかからず、ご飯を食べたい時に食べることができたり、寝たい時に寝たり、こういった当たり前のことが幸せだということに気づくことができました。

[811] 文学は、一つの解釈だけじゃなく、いろんな解釈の仕方があるし、自分の想像で内容がふくらんだり、みんなの意見をきいたりして共有するなど、文学のおもしろさ、味わい方を学ぶことができました。文学は、一人ではなくみんなで楽しむものだと感じました。みんなで意見交換をすることで一人一人の想像力がふくらみます。みんなで学んでいくという姿勢が良いと思いました。そして、私たちは限られた命しか与えられていないので、これからは生活をより充実したものにしてできるように心がけて生きていこうと思いました。

[812] イギリス文学から。イギリスの文学の形、時代、背景を読みとり理解することが大切だと思った。違った視点で見ることができた。

- [813] 人間を取り巻く自然，時間，そして愛とは何か。イギリス文学の授業を取っていないければ，中々考えることはなかったと思います。
- [814] 今まで，“文学”というジャンルを否定（苦手）していたが，文学は自分の想像力で解釈することが大切なのだと分かりました。
- [815] イギリス文学を学んで，自分の意見と他者の意見を比べるということが身につきました。自分だけの考えでなく，他者の考えも用いてより良い自分なりの意見ができあがったと思います。文の中から一つのものについて深く考え，普段は考えない所まで掘り下げて考えることができました。
- [816] イギリス文学を読んで，やはり人種も違うからなのかとても表現もダイナミックだったり，また時には切なく感情を読みとるのが簡単でまた，私たちをひきつける魅力のある詩ばかりでとても読みやすかったです。また，詩一つにしてもあんなにも深く読みとることができるのだと知って，詩の新たな楽しみ方を学ぶことができました。
- [817] イギリス文学を読んで，最初は英語で書かれていてしかも外国の詩で，難しいと感じていたけれど，授業で一つ一つ丁寧に訳をし，解釈をしていくことで，様々な読み取り方ができ，詩にこめられた作者のメッセージなどを読みとくことができ，文学を読むことの面白さを感じました。“文学”というのは，堅くて難しそうというイメージがあったが，それがくつがえされました。
- [818] 詩は1つの解釈だけでなく，読む人によって様々な解釈をされるもの・できるものだと分かった。そのような詩だからこそ今なお教材として使われるのだろう。そして多くの人が共感できることを，普通に書くのではなくある意味詩自体が比喩的であるので，表現の仕方だけでなく想像力もよくなったと思う。
- [819] イギリス文学にふれることで，イギリスに関してというより，人間や社会に関して学ぶことができたと思います。今回はその中でも“詩”をよむことでそれを感じました。1つの詩をよむにしても，解釈や捉

え方はよんだ人の数だけあり、間違いもないので、それをみんなでシェアすることが新しい発見につながり面白いのだと思いました。詩は私たちにあてはめて考えることができる身近な文学なんだと思いました。

[820] 詩には韻律があること、強弱をつけて読むと全く変わった詩になること。愛の捉え方に様々あることが分かった。純粋な愛や暗い愛。恋愛愛だけではないと思った。比喩表現が面白いと思った。こんな例え方もあるのかと想像力が今までより向上したと思う。昔の人と今の人の考え方は大きく異なっており、昔の人の方が夢を見ているなと思った。しかし意外と共通部分もたくさんあったことが印象的だった。

[821] 文学から伝わってくるメッセージを自分なりに解釈し、そのメッセージを心がけて生活していく力がついたと思います。例えば、「Ode on Solitude」からは、幸せとは何か、ということを学び、それを心がけています。

[822] イギリス文学を読んで、「生きる」ということは、とても幸せなことで、時間、自然、愛を大切にしていかなければいけないと思いました。今回の授業で、時間、自然、愛のテーマの詩を読んで、今まで何気なくあたりまえのように過ごしてきたことも、かけがえのないものだと思います。この授業を受けたことで、何事もたくさん挑戦し、吸収して自分の人生は最高だった！と言えるように、自分の財産を増やしていきたいと思いました。また、たくさんの文学にも触れていきたいです。

[823] 著者は自分の人生を元に書いてあることが多く、そこを読みとっていくとその時代の背景も見えてくるのが分かったし、著者が何をその詩から訴えているのかを考えることで、人生の中での大切な事とかが伝わってきました。普段私たちの当たり前に行っていることも、色々な意味があるなと感じました。

[824] 私はイギリス文学を学んで、作品の一つ一つから読みとられる感情や言葉の大切さを学びました。作品をあまり読んでもここに響かなかったが、イギリス文学の作品は、答えのないものも多く、読んでい

る人も考えさせられ、とても考え方やとらえ方は凄く勉強になりました。自然を人間に例えたり、思考を表現したりと、今までに出会ったことのない作品にふれることができ、良かったです。

[825] これから生きていくうえでの注意や楽しみ方、教訓を通して学んだような気がします。ストレートな言葉で教訓を受けるより、それぞれ筆者が伝えたいことを自分で考え理解していくことで想像も深まり自分の考えや視野の幅を広げることができたと思います。詩を通して様々なメッセージを受け取ることが直接言葉を受けるより考えさせられるし、面白いなと感じることができました。

[826] イギリス文学でたくさんの詩人の考えや経験を知れて、その人の一部分がわかった。この人はとても情熱的な人なんだとか、病気だけどそれに負けずに生きた強い人なんだとか、この授業を通してそういうたくさんの詩人たちの詩をよんで、ふと思い直してみたり、この人の生き方を参考にしようとか、こういうふうにはならないように生きようとか、そのときに感じたことを忘れずにこれから生きていきたいと思った。

[827] 人間の心の欲であったり、自然を美しく思う本来持つ感受性など、詩を通して深く見つめることができたと思います。花（バラやスイセン）をただ美しいと思うだけでなく、それらを通して人間の心や歴史の背景を学習できたので、とても良かったです。イギリスに行ってみたくて今までの想像するイギリスと、イギリス文学を学習して行きたいと思ったイギリスの光景は、都会と田舎ほどの違いがあり、色々なイギリスの持つ表情を見てみたいと思いました。

[828] 私が前期の授業を受けて1番印象に残っていることは、「孤独の祝福」です。今まで、孤独をマイナスとしてとらえていたので、授業を受けたあと一人である時間も大切にしようと思うことができました。みんな同じ詩を読んでいるのに、解釈の仕方だったり、考えたこともまったく違ったりするのがおもしろかったです。他の人の考え方を聞

いて、私も自分の考えをさらに深めることができましたと思います。

[829] イギリス文学を学ぶ機会というのはあまりないので、この授業で、訳、韻、文化などに触れることができたのは、よかったです。作者が何を考えてこの作品をかいたのか、それを自分なりに考え、解釈していく力が身につきました。

[830] イギリス文学で表されている事は、私たちの生活の中で起きている人に関する事が伝えられているということが分かりました。イギリス文学の深さを知る事ができて良かったです。

[831] この講義で文学作品を読んだことを通して、ひとつひとつの作品に込められた意味や解釈のしかたが必ずしも1つではなく、とても多様性のあるものなのだとことを学びました。そして、そうした解釈は読む人によるだけではなく、読む時の心境も関係してくるのではないかなと思いました。例えば気持ちが沈んでいるときは暗い詩に思えたものが、そうじゃないときには意外と明るい詩に見えたりと、同じ人、詩でも変わってくるのではないかなと、自分が読むなかで感じました。講義を受ける前は単語や文をそのままの意味で捉えたりする事が多かったですが、その背景にあるものまで推測して考えることで文学作品の奥深さを知ることができました。

[832] 考え方や良いと感じるもの、もしくは嫌だと思うことは国や時代が変わっても大きく変化することはないのだと思いました。「時間」「自然」「愛」という人にとって必要不可欠なものの存在は今の私の中にポエムとして訴えてくると感じました。思えばポエムに共感することの方が多かったように思います。これからの自分の人生はきっとポエムを助言として捉えていつかふと思いだすこともあるのかなと今改めて思います。私はポエムから人生を学んだような気持ちです。

[833] この「イギリス文学」で様々なポエムを学び、「恋は盲目」や「時間が解決してくれること」「孤独の祝福」など、印象的で心理的なことが多く納得させられることが多かった。昔の人も現代の人も悩みの内

容は違って考えることは一緒だったことにとっても驚いた。もっと文学作品を読み深めると、今とはまた違った考え方も出来るのかなと思った。

[834] イギリス文学から私は詩を通しての人の表現力を学び、考えました。

日本の詩にも様々な表現法があり、同じ用法もたくさんあります。しかし、日本に比べてイギリスの詩の表現は、詩のテーマにも合わせており、私たち聞き手にも情景を頭に浮かべることが出来るように、捉えやすく、身近な自然を例に挙げ、表現しており、これなら誰でも考えやすいなと感じました。書き方もとてもストレートな気持ちで書いていることが読んでいて伝わるような意味でとても考えやすく、読むのも深く知ることも楽しかったです。後期でも前期での授業を生かして取り組みたいと考えました。

[835] 詩は最も歴史が長く、必ず一度はみんなが学ぶものだというのを学びました。

物語などに比べて自分が好きなように解釈ができるし、他の人との考えが違っていてもそれぞれの考えに間違いはないという良さにも気づくことができました。今まで私は詩は食わず嫌いというものもあってなかなか触れたことがありませんでした。でも一度触れてみると作者の強い思いがひそかに隠れて表されていたり、これに気づくと面白さを感じるようになりました。詩は奥が深く自分が好きなように読みとることがしやすいという部分で思い入れがしやすいものなのかなと思いました。

[836] 言葉というものには、無限の可能性があると思いました。

短い詩の中で様々な表現を使って、愛や自然や時間という大きなテーマを詠んでおり、詩人たちの言葉の選び方など、素晴らしいと思います。彼らを感じたことは、今の人にも共通しており、学ぶことがたくさんあると思います。

[837] 私はイギリス文学を読んで学んだことは、人間が感じる思いに国の

違いはないという事です。それぞれ文化や生活様式に異なる点はあつ

ても、「愛」「自然」「時間」に対して、人間という生き物が持っている感覚は同じだと思いました。また、日英で似たような作品が生まれるのも一般的な題材だからではなく、様々な思いを文学に表した作者たちが究極にたどり着く所が、人間の本質として同じだからなのだと考えました。

[838] イギリス文学を読んで、その詩がどのような状況で書かれたものなのか、作者はどのような人物なのかについて学べたことはもちろんですが、自分以外の人がある詩を読んで何を感じて思ったかについて発表し合うことによって、たった1つの詩でも人それぞれ解釈の仕方が違い、その時の状態などによってとらえ方が変わってくるものだと学びました。また少し時間をおいて読んでみると、思うこと感じることは違うのかなと思いました。

[839] 「生きる」とは何だろうと考えました。また、自分にとって心が動く瞬間は何だろう、心が安らぐ場所はどこだろうと思いました。この2つの答えが出て、また新しい問いが生まれ、死ぬまで一生、自分の心を理解しようとつとめるのだなと思いました。これが「生きる」ということだなと思いました。

[840] いままでふれたことのない詩にふれて、その一つの詩からどれも様々な解釈ができ、とてもおもしろいと感じることができました。そうやって様々な考え方や見方ができる詩こそ文学的に優れているという事を学びました。イギリス文学の授業は、一方的に「学ぶ」というよりも、先生からヒントをもらいつつ「考える」という作業ができるので貴重な授業だと思います。

[841] 現在と詩が作られた時、日本とイギリスなど比較してみると、文化や考え方が違うこと、変わってきたものなどが見えてきた。色々な詩を解釈することで想像することの難しさがわかった。

[842] 色々な作品を読んで、それぞれ「愛」「自然」「時間」の3大テーマが含まれており、規模は違うけれども、どれも現代の私たちに読みつ

がれていると考えると、改めて文学とはすばらしいものだ実感しました。例えば「愛」をテーマにした詩では、これからの自分の人生にも関わってくるものなので、教訓としていつまでも頭の中に刻み込んでおこうと思いました。「その人は死んでも、作品は生きている」とはこういうことかと思いました。

[843] 文学作品とは、人間のことを様々な表現で表しているから、書かれた時代や場所、状況が違うにもかかわらず、様々な共通点や共感できる点があり、おもしろいということ。詩を読むだけでもたくさん違った意見を聞くことができるということは、生活の中で周りの人と意見がくい違うことはあたり前なのだから気にしすぎることなく、うまく調和をとって生活していけばいいということを考えました。

[844] 私は自然、愛、時間を大きく学びました。それらがどのように自分と関わってくるのか、またどのように関わればよいのか教えてもらいました。詩を読むたびに自分の考えを問われているような気がして、いつも考える力を養ってくれていたと感じます。

[845] イギリスでの時代背景や、作者がどんな人生を歩んだのか、など、そういうことを知ることでさらに深く文学は読めることが分かった。また、様々な解釈ができるので、読む人によって感じ方は違って面白いと思う。だから、年齢問わず、楽しめるのだと分かった。

[846] 私はイギリス文学が「愛」「自然」「時間」の3大テーマだと授業の初めで習ったとき、どうしてその3つなのか分かりませんでした。しかし、この3つは、生きていくうえでどんな人にも必要不可欠なものだと気づくことができました。これは時代も人種も性別も関係なく必要で大事なことです。英詩が世界中の人々に受け入れられるのは、この3つを大切にしているからなのだと知ることができました。

[847] 物事は考え方、受けとり方によって良くも悪くもなるということを1番に学びました。人生において関わる自然、愛など、身に染みて理解できました。二面性があり、自分しだいで幸せにもなれば不幸にも

なれます。何事も良い方向にとらえようと思いました。

[848] イギリス文学および英詩を学んで、作者が一つ一つの選び抜かれた単語に込めた想いを、読みとこうと努力しました。学ぶ前の私は、書かれている情景そのままを受け止めるだけで、それが何を意味しているのか深く考えることができませんでした。しかし、学んでみてたくみな比喩表現の中に筆者の伝えたかったことが少しずつわかるようになってきました。どれも私自身にも関わる教訓のようなものが多く、生涯の宝になる言葉にたくさん出会えました。

[849] やはりイギリス文学では、「愛」「時間」「自然」をテーマに普段は考えていないけれど、本当は考えなければならない事を考え直すきっかけになりました。特に時間の使い方と1人であること、また欲望については、1人の人間として考えるとても重要なテーマだと思います。私はこの授業を通して考え方が変わったりもしたので、とてもありがたいです。また詩というだけに表現が素敵だなと思いました。

□無回答 1

5 考察

既述したように、コアカリキュラムで示されている「英語で書かれた代表的な文学」における到達目標は、「英語で書かれた代表的な文学について理解している」である。「理解している」とは、どういうことか。

コアカリキュラムの解説では¹²、「英語で書かれた代表的な文学について、歴史的背景を含めて理解することが求められる。また、文学作品の鑑賞を通して、人間・自然・社会について洞察を深め、豊かな感受性を育むとともに、学んだ内容をもとにディスカッションをしたりエッセイを書いたりすることで、思考や感情を共有し学び合うことが推奨される」とされている。

これに従えば、「イギリス文学Ⅰ」がコアカリキュラムの到達目標を達成したかどうかを探るためには、次の三つのことを考えなければならないとい

うことになる。①英語で書かれた代表的な文学について、歴史的背景を含めて理解したかどうか。②文学作品の鑑賞を通して、人間・自然・社会について洞察を深め、豊かな感受性を育んだかどうか。③学んだ内容をもとにディスカッションをしたり、エッセイを書いたりすることで、思考や感情を共有し学び合ったかどうか。この3点について考えてみよう。

前項の「学生による評価」(2) ①②③で示したように、①については、50名中、49名、すなわち98%の学生が、イギリス文学について、歴史的背景を含めて理解することができたと回答している。②については、50名中、50名、すなわち100%の学生が、作品の鑑賞を通して、人間・自然・社会について洞察を深め、豊かな感受性を育むことができたとは回答している。③については、50名中、48名、すなわち96%の学生が、学んだ内容をもとにディスカッションしたりエッセイを書いたりすることで、思考や感情を共有し学び合うことができたとは回答している。

次に、「学生による評価」(2) ④を分析する。イギリス文学を読むことで、身についたり、養われたり、向上したりした力は、「解釈・鑑賞する力」と「考える力」が同数1位（前者：[401, 407, 420, 421, 425, 428, 429, 430, 432, 434, 435, 438, 440, 442, 443, 444, 445]、後者：[401, 403, 405, 406, 408, 409, 410, 411, 415, 431, 436, 437, 439, 440, 441, 447, 448]）、第2位は、「想像力」（402, 408, 413, 414, 417, 419, 422, 423, 424）、第3位は、「ものの見方」（409, 416, 418, 431, 437, 439, 444）、第4位は、「感性」（409, 411, 415, 426）と続く。

次に、「学生による評価」(2) ⑤を分析する。「イギリス文学Ⅰ」の全体的な感想として、人間、人生、生活について洞察を深め、感受性を育むことと、ディスカッションすることで、思考や感情を共有し学び合うことに言及した学生は、同数1位で、12名、24%ずつである（前者：[501, 502, 505, 510, 513, 521, 523, 533, 544, 545, 549, 550]、後者：[502, 503, 508, 509, 516, 522, 525, 526, 529, 530, 531, 541]）。

次に、「学生による評価」(2) ⑥を分析する。「イギリス文学Ⅰ」を受けて良かった点の第1位は、ディスカッションをして、思考や感情を共有し学び

合うことで、16名、32%である（[607, 608, 609, 616, 620, 623, 625, 626, 628, 632, 636, 638, 640, 641, 642, 644]）。第2位は、人間、人生、生活について洞察を深めることで、9名、18%である（[604, 618, 621, 622, 623, 624, 627, 639, 647]）。

次に、「学生による評価」(2) ⑦を分析する。「イギリス文学Ⅰ」の改善すべき点として、「イギリス文学について、歴史的背景を含めて理解すること」に言及している者が1名、2%（[703]）、「ディスカッション」の方法に言及している者が1名、2%である（[701]）。改善すべき点については、無回答が28名、56%で最も多い。記述された回答の中で最も多いのは、特になし、で、9名、18%である（[704, 705, 706, 707, 712, 713, 716, 718, 721]）。

最後に、「学生による評価」(2) ⑧を分析する。イギリス文学を読んで、学んだこと、考えたことについては、49名が回答しているが、そのすべてが、これまでチェックしてきた三つの項目のいずれかに関連している。第1位は、「人間・自然・社会について洞察を深め、豊かな感受性を育んだ」という内容で、26名、52%、第2位は、「歴史的背景を含めて理解した」という内容で、21名、42%、第3位は、「学んだ内容をもとにディスカッションをしたり、エッセイを書いたりすることで、思考や感情を共有し学び合った」という内容で、9名、18%である。

以上の分析結果から明らかなように、「イギリス文学Ⅰ」を履修した学生は、「英語で書かれた代表的な文学」であるイギリス文学について、歴史的背景を含めて理解したとすることができる。また、文学作品の鑑賞を通して、人間・社会・自然について洞察を深め、豊かな感受性を育むとともに、学んだ内容をもとにディスカッションをしたりエッセイを書いたりすることで、思考や感情を共有し学び合うことができたと言っていることができる。したがって、文部科学省のコアカリキュラムで示されている「英語で書かれた代表的な文学」という学習項目の「英語で書かれた代表的な文学について理解している」という到達目標は、「イギリス文学Ⅰ」において、達成されたと結論づけられる。

注

- ¹ 文部科学省初等中等教育局教職員課『教職課程認定申請の手引き』（平成29年），119頁。
- ² Foreign & Commonwealth Office, *100 Questions Answered* (London: Foreign & Commonwealth Office, 1998), p.63.
- ³ 川崎寿彦『イギリス文学史』（成美堂，1988年），1～4頁。
- ⁴ 川崎，23-31頁。
- ⁵ 川崎，32-43頁。
- ⁶ 川崎，80-91頁。
- ⁷ 本論中の詩の原文の引用は，すべて使用した教科書，新井明『英詩鑑賞入門』（研究社，
- ⁸ 1986年）による。
- ⁹ 本論中の英詩の翻訳は，すべて筆者による。
- ¹⁰ 平井正穂『イギリス名詩選』（岩波書店，1990年），4～7頁。
Cleanth Brooks & Robert Penn Warren, *Understanding Poetry*, Fourth Edition (New
- ¹¹ York: Holt, Rinehart and Winston, 1960) 参照。
オードとは，賦，頌詩，頌歌の意。特定の人物や事象に呼びかける高められた雰囲気
- ¹² 瞑想的抒情詩である（平井，140頁）。
文部科学省委託事業『英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業』平成28年
度報告書（東京学芸大学，平成29年），115頁。

